

令和4年度 課程博士学位請求論文要旨

近現代日蓮主義の研究

立正大学大学院
文学研究科仏教学専攻

戸田教徹

本論文の目的は、近現代における日蓮主義の諸相を明らかにし、日蓮教団史研究の視点から、「日蓮主義とは何か」という問いを明らかにすることである。

近代の日蓮主義に関する研究は、戦後、戸頃重基に代表される批判的研究からはじまった。これらの研究において、日蓮主義とは国家主義的な右翼思想であると断罪的に論じられ、そのような論調は一九九〇年代に至るまで、大筋受け継がれてきたといえる。しかし二〇〇〇年代以降、近代仏教史研究の深まりとともに、田中智学や本多日生の研究を中心に日蓮主義に関する研究が多くなされるようになり、現在も日蓮主義の再評価が進められている。しかし、これらの研究は宗教学・社会学・思想史学等からのアプローチによるものがほとんどであり、日蓮教団史研究の視点からは、未だ多くの課題が残されている。

私の問題意識は、明治・大正・昭和戦前期という激動の時代に掲げられた「日蓮主義」とは如何なる思想であったか、また現代に生きる我々は「日蓮主義」をどのように受け止めるべきか、という点にある。

本論文では、まず、日蓮主義の創唱者である田中智学（一八六一—一九三九）の日蓮主義について検討した。智学はこれまでの日蓮主義研究において、最も多く言及されてきた人物であり、その事跡や思想についてはさまざまな面から検討されてきた。それらの蓄積された研究を参照しつつ、未検討である宗学的課題にも目を向け、「智学の日蓮主義」とは如何なる思想態度であったか、智学が「日蓮主義」という語にどのような意義を込めたかについて考察した。

続いて、本研究ではジャーナリストや政治家として活躍した石橋湛山（一八八四—一九七三）に注目し、日蓮主義研究という視点から湛山を論じた。湛山についての研究は、外交論・経済論から自由主義や平和思想といった思想面まで、非常に多くの蓄積がある。しかし、湛山の出自である日蓮宗との関連、特に思想面のつながりについては、詳しい検討がなされてこなかった。また、日蓮主義研究の中で湛山が扱われることもほぼなかった。湛山の言説や思想には智学に通じる点があり、その検討を通じて、「智学の日蓮主義」とは異なる日蓮主義の一面があることを知ることができる。湛山は自身の思想を「日蓮主義」と呼ぶこともなく、「日蓮主義者」を自称することもないが、日蓮の行動や思想を自身の指針とし、大学長時代には「祖師へ帰れ」との言説も遺している。そのような湛山の思想を、我々は果たして日蓮主義と捉えるべきであろうか。「湛山の思想を日蓮主義と呼ぶべきか」という問題は、そのまま「日蓮主義とは何か」を問うことに直結する。そのような問題を検討するために、湛山の日蓮受容のありようを確認した。日蓮主義研究の対象として第一に挙げられる智学と、日蓮主義か否かの境界線上に位置する湛山を比較検討し、「日蓮主義」の本質を見極めるべく検討を進めた。

本論文の構成は以下のとおりである。

まず序章において、田中智学研究史と石橋湛山研究史をそれぞれ整理し、課題を確認を行った。

「第一章 田中智学の生涯」では、活動の変遷等を踏まえ、智学の生涯を「出

生から還俗まで(思想形成期)」、在家仏教を提唱しつつ宗門諫暁活動を行った「蓮華会結成から立正安国会初期(在家仏教形成期)」、宗門外からの論争をきっかけとして宗門改革に一層力を入れる「立正安国会中期(宗門改革期)」、日清・日露戦争を経て日本国体学が形成される「立正安国会後期(国体学形成期)」、智学の門下団体が統合され活動の最盛期を迎える「国柱会前期(活動統合期)」、明治節制定等の諸活動を通じて国体宣揚が最も高まりをみせる「国柱会中期(国体宣揚期)」、会務を離れ文筆と芸術伝道に力を注いだ晩年「国柱会后期(活動大成期)」の七期に区分し、概観した。

「第二章 田中智学の在家仏教について」では、在家仏教の側面に着目し検討を進めた。「第一節 還俗の経緯と要因」では、還俗までの経緯とその要因について確認した。「第二節 智学の在家仏教論」では『仏教夫婦論』と「仏教僧侶肉妻論」を中心に、また「第三節 その他の著述における在家仏教論」ではそれ以外の著述を資料に智学の在家仏教論を検討し、在家仏教の持つ社会志向性が日蓮主義へと展開したことを指摘した。「補論 国柱会における田中家家族の役割—家族教化の一例として—」では、桐谷征一氏所蔵資料を紹介し、智学が提示した家族教化の事例として田中家家族の活動等について論じた。

「第三章 田中智学の宗学理解について」では、智学の宗学的立場を明らかにするための諸課題について検討した。「第一節 『妙宗式目講義録』にみる智学の学的態度」では、智学の基本的宗学態度を確認した。「第二節 智学の本尊観—佐渡始頭本尊中心観について—」では、思想の中核となる智学の本尊観の特徴と、〈四聖帰命式〉始頭本尊中心説の形成過程を明らかにした。「第三節 智学の日蓮教団史研究」では智学の教団史受容を、「第四節 智学の日蓮教学史受容と先師への評価」では智学の先師に対する評価を確認し、智学と各先師の思想的連関を明らかにした。

「第四章 田中智学の国体論について」では、智学の国体論について検討した。「第一節 智学の神道観」では、国体論を検討するための前提として智学の神道観を確認した。「第二節 天照太神の位置づけ」では、宗学と国体論の最も重要な接点として天照太神の位置づけに着目しつつ智学の国体論の内容を確認し、曼荼羅本尊における天照・八幡の座配を重視する本尊観が智学の国体論を支えていることを指摘した。「第三節 法華神道との関係」では、国体論と法華神道の共通点と相違点を指摘し、智学の国体論に法華神道からの影響が見られることを明らかにした。

「第五章 田中智学の日蓮主義」では、前章までの内容をもとに「智学の日蓮主義」について検討した。「第一節 「日蓮主義」の成語化」では、先行研究をもとに「日蓮主義」造語の経緯を確認した。「第二節 智学の日蓮主義」では、先行研究における「智学の日蓮主義の特徴」に関する指摘に対し批判的検討を行い、智学が「日蓮主義」に込めた意味を再考した。

以上、第一章から第五章までは「智学の日蓮主義」についての検討である。続く「第六章 近代日蓮宗と日蓮主義」では視点を変え、近代日蓮宗において智学

の日蓮主義がどのように受容されたかについて検討した。「第一節 優陀那院日輝の学的態度」では、近代日蓮宗の思想的基盤となった優陀那院日輝の宗学態度を確認した。「第二節 智学の日輝批判」では、第一節の内容を踏まえ、智学による日輝批判の具体的内容を確認した。「第三節 日蓮宗と智学—還俗以後の活動を中心に—」では、智学の還俗から明治中期頃までを中心に智学と日蓮宗の関係を、続く「第四節 明治後期以降にみられる日蓮宗と智学の関係改善について」では明治後期以降の両者の関係性をそれぞれ明らかにした。

第七章から第十章は石橋湛山についての検討である。「第七章 石橋湛山と日蓮宗」では、湛山を教団史研究の視点から捉えるための導入として、湛山と日蓮宗の接点について確認した。「第一節 湛山の生涯」では湛山の生涯を概観した。「第二節 湛山にみる近代仏教の特質」では、湛山に「在家仏教」と「日蓮主義」という近代仏教の二つの特質が見られることを指摘した。「第三節 湛山と日蓮主義者の交流—「山川智応書簡」を資料として—」では、国立国会図書館憲政資料室蔵「石橋湛山関係文書」中、「山川智応書簡」の内容を紹介しつつ、智学の高弟である山川智応と湛山の交流について論じた。

「第八章 石橋湛山思想の淵源」では、「第一節 父・杉田日布」、「第二節 師・望月日謙」、「第三節 大島正健とクラーク流教育」、「第四節 田中王堂とプラグマティズム」の四節を通じ、湛山の思想形成に影響を与えた四人の人物について検討した。

「第九章 石橋湛山における日蓮遺文の引用について」では、湛山の言論における日蓮遺文の引用に着目し、湛山の日蓮受容について検討した。「第一節 湛山の日蓮観に関する先行研究」では、湛山の日蓮観に関する先行研究の指摘を整理した。「第二節 中学校時代」、「第三節 明治から大正期」、「第四節 昭和戦前から戦中期」、「第五節 昭和戦後期」、「第六節 立正大学長時代」では、各時代における湛山の言論の中から日蓮遺文が引用される文章を網羅的に検討し、時代ごとの特徴を明らかにした。

「第十章 石橋湛山の日蓮主義」では、前章までの内容をもとに、「湛山の日蓮主義」について検討した。「第一節 湛山の自由主義」では湛山の自由主義思想について、また「第二節 湛山の宗教観」では自由主義に基づく湛山の宗教観について確認した。「第三節 湛山の日蓮観」では湛山の日蓮観が自由主義に基づくものであることを明らかにした。

最後に、「終章 日蓮主義とは何か」において、各章のまとめを行いつつ、「日蓮主義」に通底する三つの要素を提示した。一つ目は、自身の思想や行動の根拠を日蓮に置くという態度。二つ目は、日蓮の思想や行動原理を以て社会に活かそうという「社会志向性」。三つ目は、日蓮遺文を直接読むことができるようになった点や、また仏教が寺院の外に開かれる状況が整ったという意味で、近代以降の動向であるという「近代性」。これらの点こそ、所謂「法華信仰」・「日蓮信仰」・「祖師信仰」と「日蓮主義」とを分ける要件であると考えられる。これらの要件を「日蓮主義」の大枠と捉え、今後は個別の事例研究を進めたい。